

ニューメディア環境下の日常生活

—兼論 デジタル時代の民俗学—

王 傑文

WANG Jiewen

翻訳：西村 真志葉

我々は全力で今を覆い隠そうとする、自分の目に触れさせまいとして。すべての時代の人は皆こうしてきたのだ。

—ハーバート・マーシャル・マクルーハン[馬歇爾 2006: 98]

はじめに

アカデミズム界の一般的な印象に基づいていえば、民俗学は文化の残留や古い伝統、旧社会の記憶などを扱う学問であり、伝統性は至極当たり前のように民俗の本質的特徴と見なされているだろう。しかし、その性質の上からいうならば、民俗学は現代学であり、色濃い歴史的意味を有する現代学である¹。まさにこうした認識に支えられ、ここ30年ほどの時間をかけて、普通の民衆の日常生活が少しずつ中国民俗学の注目を集めるようになってきたのである。現代の社会生活に適応するために、普通の生活者が自身の民俗伝統をどう運用するのか、これは一部の民俗研究者にとって、その考察の中心を占める課題である。高丙中が述べるように、「中国民俗学が1990年代以前と非常に異なっている点を様々な変化を通じて見てとれるが、実際、多方面において180度の転換を遂げている。これは民俗学の新しい時代なのだ。今日、社会的価値体系における民俗の位置づけは完全に異なっており、今日の民俗学もその理論と方法の上から言えばすでに新しい学問なのである」[高 2010: 196]。

一つあきらかなのは、日常生活実践を未来の中国民俗学の研究方法と責務に位置づける動向は、中国人が古来より好んできた文学的・史学的な雅趣から生まれたものではない、という点である。それは、現下の社会を生きる普通の民衆の日常生活に寄せられる関心から、また、日常生活世界の激変が招いた諸問題への切実な注目から、そして、意に適う日常生活を追求する志向性などから生まれ、営まれている努力である。日常生活実践に焦点を合わせる民俗学者たちは、次の点を明確に認識している。すでに世界はより早く、便利に、またより多元的に、自由に、グローバル化した情報が流通・交流する時代に入っている、と。当然のことながら、こうした時代において、日常生活世界の激変の大半は、人間がコミュニケーションに用いるメディア(媒体)の変革によって、引き起こされているのである。

ニューメディアの連続的かつスピーディな変革は、「枯れ草を粉砕し朽ち木を切断する」かのような威力を生み出す。この巨大な力を意識するようになった民俗学者たちは、伝統的な生活形式と観念が、瞬時にニューメディアの内容にとり込まれてゆくことに気がついた。そこで、彼らはニューメディアで伝達される伝統的内容に着目し、これを考察しだした。民俗が脱(再)コンテクスト化される際の実践の経緯およびその結末を描き、分析しようと試みたのである [Degh 1994; Siikala 2004: 2]。また他方では、情報メディア環境学に啓発された一部の民俗学者が、ニューメディアのこうした媒質そのものの重要な意味に気づき [鮑辛格 2014; Spitulnik 1993: 293-

315]、この媒質が普通の生活者のイデオロギーを構築するかもしれない、その考え方や行動習慣を形づくる潜在的な力となるかもしれない、と意識しはじめたのである。

ニューメディアが遍在し、いたるところから入り込むこの時代にあつては、情報メディア環境学の見識は、民俗学者がニューメディア環境の中の日常生活をより深く考察する助けになるだろう。この環境下では、民俗学が関心を寄せる民が、ニューメディアによっていつしか新たな民として再構築される。民俗学が注目する俗も、今まさにニューメディアのなかで自由に生産、消費される流行となりつつある。ニューメディア環境が引き起こす日常生活革命は、民俗学はこのディシプリンそのものの基本的な前提について、厳粛かつ全面的な内省を強いると同時に、この内省を実現するためのよい契機を与えてくれているともいえるだろう。

1. 民俗学研究の焦点となりつつある日常生活

ディシプリン発展の史的観点から見ると、民俗学でもっとも早く確立された研究対象は、Folkloreである。英単語としてこの言葉が意味するのは民衆の知識だが、そのうち、民衆 (Folk) と知識 (lore) がそれぞれ何を指すのかについては、異なる時代、国、学者間で見解が完全に一致したことはほとんどない。このキーワードについて、諸外国の民俗学が国際的な場で真剣に議論し続けてきたにもかかわらず、である [高 2010 : 3-127]。とはいえ、全体的に見れば、大半の民俗学者は、知識としての民俗にどんな内容が含まれるかを列挙し、これらの知識を保有する特定グループを民衆として相対的に規定し、説明を加えるというやり方を好んでいる。このような民俗の規定方法は、あきらかにウィリアム・トムスやエドワード・バーネット・タイラーといった早期の民俗学者達の影響を受けたものである。1950年代に入ると、諸外国の民俗学界では、ようやく一部の民俗学者のあいだで、民衆の知識に代わる言葉として民衆の生活 (Folklife) が使われはじめ、民俗学の研究対象に再定義が試みられるようになった。この研究対象の変更と呼応して、民と俗という二つのキーワードの内容についても、新しく規定する者も登場した。そのうち、影響力がもっとも大きいのは、アラン・ダンデスが『What is Folklore ?』や『The American Concept of Folklore』で試みた再規定だろう [Dundes 1965 : 1-3、1975 : 3-16]。彼の規定によれば、民俗の民とは共通の伝統を有するすべての集団、また、民俗の俗は共有されるすべての知識であつてよい。この新しい規定の出現は、民俗学というディシプリンの新しい研究対象として、民衆の生活が民衆の知識にとって代わり得ることを意味している。そして、民俗学が現下の日常生活に注目しはじめたこと、さらに民俗学が人々の過去を現下の日常生活の過程のなかに位置づけたうえで考察を加えはじめたことを意味している [王 2012 : 149]。

諸外国の民俗学界でこのディシプリンの研究対象が、民衆の知識から民衆の生活へ転換しつつあつたとき、中国民俗学者もまた、自らの史的、現実的コンテクストに根差しながら、民衆の生活を見つめる中国民俗学から日常生活 (Everydaylife) を見つめる中国民俗学へ、転換を積極的に進めていた。中国人民民俗学者はこのディシプリンの研究の重心を、俗から民へ移し変えるだけで満足せず、さらに民から現代の市民 (Citizen) への転換を試みていた。これと呼応して、彼らはこのディシプリンの研究の重心を民俗事象から民衆生活へ移し変えるだけでなく、民衆生活からもう一歩踏み込んで、日常生活および日常文化 (Daily Culture) へと、つまりあらゆる普通の生活者の日常生活的实践へと転換していったのである [周 2016 : 1]。

普通の生活者の日常生活的实践を強調するには理由がある。それはまず、過去を志向する民

俗学の伝統的手法と区別を図るためである。また、事象を志向する研究上の伝統と区別を図るためでもある。普通の生活者とは、現下の日常生活におけるすべての集団を指し示す言葉であり、これらの集団あるいは個人が具体的な生活世界において伝統を借りて生活イベントを処理する過程が、日常生活実践なのである。一つの過程であるということは、日常生活実践がたえず生成される建設的な行為であることを示している。このうち、民と俗はいずれも不変的に固定化されることはないし、いかなるオーセンティックな内容を有することもない。普通の生活者の日常生活実践に関心を寄せるディシプリンとして、民俗学も二度と民俗のオーセンティックな意味を解釈することをその目標としてはなるまい。これとは逆に、実践という概念が特定のコンテクスト下における関連集団(あるいは個人)間の相互行為の過程を意味するのであれば、介在する相互行為の担い手たちはいかにして関連する文化的資源(民俗は文化資源のなかで最も重要なひとつである)を借用し、協力して日常生活実践の問題を処理するかを、必然的に注目しなければならないだろう。リアルな実践においては、現下の日常生活の問題を処理するために、過去の某民俗伝統を復活させることがあるが、これは当然、その未来にも影響を及ぼすことになる。連続性を有する総体として、実践における過去—現在—未来の間の相関が、将来の民俗学の考察の核心を占めるだろう。

民俗学というディシプリンの対象、研究方法および使命が、革命的に更新されるとき、民俗学というこのディシプリンの名称はもはや時代遅れのようにすら見える。この名称が身にまとっている語彙の慣性が、一般大衆の間で、ひいては人文社会科学の領域の間で引き起こしている誤解の根は、非常に深い。民俗学という名称がこのディシプリン自体にもたらした負の影響の深刻さは、実際に計り知れないのだ。この意味において、ディシプリン名称としての民俗学とは意味的束縛(semantic imprisonment)であり、このディシプリンそのものの正常な発展を著しく阻害しているのである。

2. 動的プロセスとしての日常生活そのもの

民俗学者たちが普通の生活者の日常生活実践をこのディシプリンの研究対象とするならば、現下の日常生活実践にどのような特徴があるのかを考えねばならない。そこには、日本人民俗学者河野眞が述べる以下のような特徴が含まれるのは明らかだろう。

つまり現代の私たちの生活は、科学的な技術機器との自然な交流のなかで営まれています。こうして私たちは科学技術が一般化した環境に暮らしているのですが、そうした今日の状況が過去の生活文化とは違ったものとなっていることは、誰もが何らかのかたちで感じています。テレビや携帯電話が欠かせない生活のあり方が、伝統的な生活の形態と異なることは明らかです。昔は存在しなかった個々の機器が機能しているだけでなく、それらの機器は全体として生活の大きな枠組みを変化させてきた面もあります[河野 2003: 24]。

問題は、河野がいうような現代生活中の「自然」な現象はいかにして「自然」になったのか、という点である。現代生活における科学発明と技術革新が絶え間なく蓄積、加速するプロセスであるなら、現下の日常生活における感覚として、人々はいつから「過去」と「今日」が「違ったものになっている」と意識し始めたのだろうか。仮に特定の個人が、その幼少期から「テレビや携帯電話」が

ない環境で育ったのであれば、「テレビや携帯電話」が広く使用される前と後について敏感に識別できるだろうが、「テレビや携帯電話」がすでに日常生活環境の一部となった中で暮らす若者にとって、こうした差異を想像することはおそらく難しいだろう。

言い換えれば、現下の日常生活がニューメディアにより連続的に構築されている日常生活だと意識するとき、民俗学者は同時に、この日常生活がひとつの動的プロセスとして存在していることを意識する必要があるのだ。もしも日常生活を穏やかに流れる河川のごとく仮定すれば、この日常生活の河川に衝撃的な物珍しい効果を持った新技術や新発明が突然放り投げられれば、それは当然水面を揺らし、波を立てることになる。こうした新技術や新発明の荒波が、人々がすでに築いている日常生活の堤防を無情に打ちつけ、その習慣的な考え方や行動の仕方を変えてゆくことは想像に難くない。しかし、連続的に発生するプロセスとして、日常生活はつねに「親しみのないものを親しみのあるものへ変え、風習の崩壊に慣れさせ、新しい事物を取り入れるために抗い、調整を行って異なる暮らし方に適応する」のであり、「このような過程が成功する、あるいは失敗する足跡が、すなわち日常なのである。日常は、もっとも革命的精神に満ちた創造が、いかにして低俗極まりない境地に墮落するかを目撃する。暮らしのあらゆる領域で起きた激烈な変革は、いずれも『第2の自然』になり果てた。新たな事物は伝統となり、過去の残存は古臭く、時代遅れになった後、新たに生まれる流行に利用されるのだ」[海黙爾 2008:5]。

日常生活が絶えず革新され、革新が連続的に日常生活化されるという相互的、弁証的な過程は、民俗学固有の学術観念を徹底的に変えることとなった。民俗や伝統といった概念は、オーセンティシティ化、固定化というような処理を施される理由を失った。現下の日常生活的实践において、新技術と新発明は、特定集団と個人の外的環境や知識伝統、考え方、習慣を猛烈な勢いで変容させ続けている。伝統的な民俗学が規定する民俗は、消失してしまうか、あるいは、姿形を変えて新しいかたちで表出され、やや異なる形式や意味、機能を有することになる。そして、こうしたいわゆる新技術と新発明のなかでも、もっとも革命性や基本性を有するのが、ニューメディアなのである。

3. ニューメディア主導下の日常生活

21世紀に入ってまもなく、中国はおよそ全国民がデスクトップパソコンやノートパソコン、タブレット端末、スマートフォン、有線LAN、Wi-Fiなどを普遍的に使用するようになり、ニューメディアに覆いつくされる時代が到来した。コンピューターテクノロジーによるメディア化したコミュニケーションのかたちは、すでに社会全体の日常生活全般に浸透している。ここで述べるニューメディアとは、コンピューターメディアテクノロジーに基づくあらゆる技術分野、たとえばFacebook、Twitter、YouTube、Wikipedia、Blog、Foursquare、Myspace、Digg、Second Life、Podcastingなどを含む。ここでその新しさを誇張するのは、ニューメディアテクノロジーの日進月歩的な性質を際立たせ、「デジタルテクノロジー、クラウドコンピューティング、ビッグデータ、ヒューマン・マシンインテグレーション時代などの疾風怒濤の如き発展スピード」[葉文森 2014:1]を強調するためである。マクルーハンが言うように、それは「運用されるときにはすでに時代遅れになっているかの如く」である。ニューメディアという言い方は、その狂乱的なまでに絶え間なく更新され、発展し続ける勢いを強調するものである。

普通の生活者たちは、どのようにコンピューターメディアテクノロジーに依存して、現下の日

常生活を営んでいるのだろうか。かつて工業機器時代の到来が人々の暮らしや行動の仕方を根底から再規定したように、コンピューターメディアテクノロジーに基づくデジタル時代は、社会の生活世界の巨大な変容をけん引している。今まさに全世界において、各国の人々がまったく新しいかたちで自らの日常生活の過程を概念化し、その人的コミュニケーションとパーソナルアイデンティティのパターンを再構築している、これはもはや疑いようのない事実だろう。現在、多くの人々（特に都市部の中流層）は、記号的に連動するバーチャル世界を通じて、そのソーシャルメディア的なイメージ管理を実施し、これにより自らの位置づけをデザインしている。デジタル世代(Digital native)にとっては特にそうなのであり[Blank 2013: xii-xiii]、デジタル世界とは、すなわちデジタル世代の日常生活世界なのだ。

デジタル世代は、デジタル化した環境で生まれ育った年齢集団を指す。彼らにとって、多元化したパブリックメディアは、周辺の人々の熱烈な支持を簡単に集めることができるものである。コンピューターメディア化したコミュニケーションモデルは、彼らが外部世界とつながるかたちを、個人の生活世界を、根本から構築している。また、この集団と区別して、デジタルテクノロジーが出現し、発展を遂げてゆくのを目撃していた集団を、民俗学者たちはデジタル移民(Digital immigrants)と総称した。彼らはニューメディアの出現に徐々に気づき、理解し、選択的に、受動的に、このテクノロジーを受け入れ、使用しているのである。もちろん、いずれの集団にとっても、新しい暮らし方がもはや既成事実となっている。たとえば、昨今ではレストランを探すでも通行人に住所を尋ねずともナビを片手に進めばよいし、何を買うにもショッピングモールへ出かけることなく、自宅で購入画面をクリックすればよい。子どもたちにしろ、両親が書籍や新聞を手で文字を読む姿よりも、うつむいて端末画面をスワイプする姿のほうをより頻繁に目しているだろう。また両親の方も子供が低俗な雑誌を読んでいないか気にならなくなった代わりに、子供がどんなサイトを訪問、閲覧しているかを監視する、といった具合である。

結局のところ、ニューメディアがこれほど広範囲で受け入れられ、更新され続けていることは、民衆の日常生活にとって、何を意味しているのだろうか。それは民俗が伝承され、解釈されるかたちに、どのような影響を及ぼしたのだろうか。情報メディア環境学の観点によれば、どう答えを求めるにしろ、メディア自体が持つ威力を断じて軽く見てはならない、となる。なぜならそれは、人間社会の相互行為の環境、方式、ひいては考え方のパターンまで、徹底的に変えてしまうからである。

マクルーハンは次のように述べている。

- 1) メディアとはすなわち情報である(Message)。あらゆるテクノロジーがメディアであり、あらゆるメディアは私たち自身の外在化と伸展である。
- 2) メディアとはすなわち環境である(Ecology)。あらゆる人工的製造物、アート、テクノロジーは、それがコミュニケーションに関連するか否かを問わず、一つの背景を生み出す、つまり環境と関連テクノロジーの複合体を生み出す。多くの場合において、こうした背景は当然視される既成事実となり、意識されることがない。
- 3) メディアとはマッサージのようなものでもある(Massage)。我々はテクノロジーが創造してくれる環境を体感し、享受できる幸せに恵まれながら、それに気づくことがない。

マクルーハンがしばしば用いる聡明な例えを引用するならば、「私たちは誰が水を発見したのか知らないが、その発見者が魚でないと断言できる」のである。メディアテクノロジーのもっと

も強大な影響は、我々に意識されない。こうした外在化した環境が目に見えないのは、まさにそれが環境だからなのだ。環境のこの特徴が、すなわち「魚は水を知らない」というメタファーの意味である。

初期の道具から自動車、コンピューターメディアテクノロジーに基づくニューメディアにいたるまでのあらゆる人工物が、すべて人体とその神経系統の伸展であるならば、それらが人類の進化の構成部分であり、人体の中でもっとも人間味溢れるものだとすることを意味する。と同時に、それらの潜在的な効果は、往々にして人間の意識を超えたものであることもまた、示唆している。

メディア自体が同時に「情報」、「環境」そして「マッサージ」でもあるという認識から、人間社会がすでにメディアの特質（長所と短所を含む）について深い理解を有していることが分かる。マクルーハンはその著書『メディアの法則』において、啓発的な理解の方法を提示しているが、それは人工物が人間と社会のなかでどのように運用され、文化的効果を生産するのかを探るためのものであり、「テトラッド＝四つ組」と称された。この四つ組は、あらゆるメディアを理解するための四つの視点である。

- 1) このメディアは何を強化し、拡張したか
- 2) なにを衰退させ、あるいは何にとって代わったのか
- 3) 衰退したものを再現させたか、あるいは昔の何を（おそらく過去に廃れたもの）を回復したのか
- 4) 極限まで推し進められた後、どう豹変し、反転し、何になったのか[麥克盧漢 2006:194]

ニューメディアとしてのデジタルテクノロジーは、日常生活のコミュニケーションに広く応用されるようになったが、その情報流通の速度と範囲はもはや限界点がないかのようだ。現実世界とバーチャル世界の境界線は、まさに曖昧になりつつある。しかし、「今日、私たちはニューテクノロジーが生み出す新しい環境に気づくことができるが、その理由の一つとして、これらのニューテクノロジーが次から次へ取って代わられるスピードが速すぎるため、という点が挙げられる。私たちはこうした変化の中の情景を、その走馬灯のような交代劇を、見ないわけにはいかないのだ」[麥克盧漢 2006 : 152]。情報メディア環境学から提供される知見は、あらゆる民俗現象が存在し得る社会環境がすでに根本的な変化を遂げていることを、私たちに意識させる。今や、脱(再)コンテクスト化は、すべての普通の生活者が文化的資源を応用して日常生活的実践を展開する際の基本的パターンとなっている。情報メディア環境の目まぐるしい変容の事実を目を背けるということは、自分で自分を騙していることに他ならないのだ。

4. ニューメディアと民俗学の概念の枠組み

もちろん、一部の民俗学者はとうの昔にニューメディアの重要性に気づいており、積極的かつ能動的に、ニューメディアと民俗の関係に考察を加えている。たとえば、アラン・ダンデスは次のように述べている。「テクノロジーは民俗学者の友人であり、敵ではない。テクノロジーは民俗を消滅させるのではなく、逆に民俗が伝えられる際の重要ファクターとなり、しかも新しい民俗の誕生のために感動的な靈感の源を提供する」[Dundes 1980 : 17] ²。この意見が、当時民俗学全体を包んでいたホ・ン・モノ主義信仰に標を絞って述べられているのは、あきらかである。当時はフェイク・クロアやフォーク・ロリズム、オーセンティシティに関する議論が盛んな頃でもあり、ダ

ンデスの発言は強い啓発を促すものであった。事実、1960年代、ドイツ民俗学者ヘルマン・パウジンガーはすでに科学テクノロジーと民俗に関する大著を記しており、次のような指摘を行っている。「科学技術の所産を前にしても落ち着いていることができたり、科学技術がますます<自然なもの>になっていることをよく表しているのは、民俗文化の領域の隅々にまで、科学技術による道具立てや、科学技術に関係したモチーフが浸透し、またそれらが分かり切った存在となってきたことであろう」[鮑辛格 2014]。

問題は、テクノロジーが日常生活に音もなくひっそりと浸透している現実を完全に認めながらもなお、民俗学がより掘り下げた課題について、答えを見つけなければならない点にある。たとえば、更新と世代交代のスピードが増すばかりのニューメディアは、普通の生活者の日常生活のコミュニケーションのかたちはどう影響し、またこれを再構築しているのか。あるいは、ニューメディアが構築する環境において、日常生活を研究対象とする民俗学は、既存の理論フレームと概念体系をどのように省みる必要があるのか。またたとえば、インターネットというコンテキストにおける民衆の日常的コミュニケーションでは、いわゆる民俗、伝統、信仰、伝説、パフォーマンス、語りなどはいったい何を指すのだろうか。ニューメディアテクノロジーは口承芸術のパフォーマー、観衆、パフォーマンスの生産性と言った概念をどう複雑化したのだろうか。

本稿では、民俗というキーワードを例に、ニューメディアが民俗学の概念体系およびその理論の枠組みにもたらした影響についてのみ、簡単に考察してみよう。1970年代、アメリカのニューフォークロアの主要な理論家であったベン・アモスがすでに「民俗とは小グループ内部で発生する芸術的な交流」と指摘しているが[Ben-Amos 1971:13]、この定義には少なくとも以下のような三つの意味が含まれているだろう。

- 1) 民俗はフェイス・トゥ・フェイスの相互行為である。これはパフォーマーと聞き手の間に反射的、生成的な相互関係が存在することを意味する。
- 2) 民俗は内部で交流される知識である。これは交流に参加するすべての構成員が民俗の著作権を有していることを意味する。
- 3) 民俗は美的知識である。これは交流に参加する構成員全員がそのコミュニケーションのかたちについて、高度な美的関心を寄せていることを意味する。

だがしかし、ニューメディアによって構築されたコミュニケーションのコンテキスト下では、口承、文字、画像、デジタルなど多種多様なかたちを覆いつくすように、人々が相互行為を営んでいる。彼らのインターネットテクノロジーに依存した日常生活の交流パターンを目にした民俗学者は、ベン・アモスの述べるところの「民俗とは小グループ内部で発生する芸術的な交流」という定義について、必然的に厳しい内省を強いられることになる。まず明らかなのは、民俗はもはや「小グループ内部の知識」として交流されるものではない、という点である。逆に、各種民俗は何度も繰り返し脱(再)コンテキスト化される。しかも、ニューメディアのコンテキストにおいて、こうした実践はすでに多様化し、しかもより頻繁に、より踏み込んだかたちで行われる。したがって、民俗学はいずれ「小グループ内部」というような制限を諦めざるを得ないであろうし、また、著作権を強調する従来の姿勢も改めていかねばなるまい。そしてその代わりに、交流と伝播という課題に集中的に取り組まなければならないだろう。

次に、民俗学者は伝統という概念についても、再考を迫られるだろう。普通の生活者にとって、オーセンティックな、伝統的な起源はあきらかに重要ではなく、より重要なのは、彼(彼女)たち

がアイデンティティを読み取る民俗の中からある種の連続性と一貫性を感じ取ることができる、という点である。つまり、彼(彼女)たちが某民俗は伝統的で、地域的で、あるいはそれがその共同体の中から生まれてきたものだと思ふのであれば、その民俗はたしかに伝統的なのだ。

また、民俗の定義において、アイデンティティの共有を強調するのではなく、差異的アイデンティティを強調することが求められるだろう。ニューメディアテクノロジーは、人々がある種のアイデンティティを共有するという前提だけで民俗的現象が発生するわけではない、と説明する。むしろ多くの場合においては、人々がまさに異なる文化的アイデンティティを有しているからこそ、民俗学的現象は生じるのだ。たとえば、歴史上、印刷技術が文字の伝統と口承の伝統を区別し、それぞれと呼応する二つの集団に区分した。だが、それは同時に文字の伝統と口承伝統の融合を招き、両者によって構成される共同体文化の形成を促し、ナショナリズムを刺激することになったのだ [Blank 2009: 1-20]。同様に、ニューメディアもこれと似た事例を作り出している。デジタル化ネットワークは、今まさに社会アイデンティティという既存概念を組み替えており、多様化した文化的アイデンティティはまるで鼠算のように差異のアイデンティティを生み出し続けている。そして、こうした差異のアイデンティティは、今まさに現下の民俗的なパフォーマンスを展開するための社会的基盤ともなりつつあるのだ。

その他の日常生活の領域においても、ニューメディアテクノロジーが、すでに人的交流と相互行為のパターンを徹底的に変えてしまっている。たとえば、携帯電話で拡散・転送されるジョークなどは、すでにかかなりの程度で語りものとしての笑い話にとって代わり、あるいはこれに浸透している。その伝播のスピードや範囲、人間関係の構築、鑑賞経緯の多様化などいずれの方面においても、巨大な差異が生み出されている。もう一つ例を挙げよう。インターネットで伝えられる伝説は、口承の伝説とは明らかに異なる点がある。前者の伝説には、インターネット上の疑似的なコミュニティ(新興の民衆グループ)がそれぞれ有している独特な交流の仕方や組織のパターンが付与されていたり、現在もはや欠かせない自己表現の重要手段となっているネットスラングや絵文字、スタンプなどを有していたりする。こうした例からも分かるように、ニューメディア時代の普通の日常生活者は、今まさにニューメディアテクノロジーを利用しながら、創造的な交流のかたちを通じて、ある種のアイデンティティを構築しているのである [Blank 2009: 1-24]。

ニューメディア環境下ですでに創造されている表現のかたちの豊かさと多様性を意識するならば、民俗学者はこのディシプリン自体の研究対象や使命、研究手法、ひいてはその研究倫理の問題について、改めて規定し直さずにはいかないだろう。たとえば、民俗学者のフィールドワークでは、今後もはたして「この地で」、「あの地へ赴く」、「この地を訪れる」というパターン化した行動様式が守られなければならないのだろうか。研究対象がすでにその日常生活を自分自身で書き、表現するようになっている今日、民俗学者はバーチャルコミュニティのなかでフィールドワークを行ってもよいだろうか。もしもセルフメディア時代の普通の生活者たちがみな書き手であるならば、そして、セルフメディアが普通の生活者の文化的な権利や文化アイデンティティ、文化的な自負を増幅させていると客観的に考えられるのならば、民俗学者はいったいどのように伝統的な民俗誌のディスコースの中に隠された権力関係を反省すべきだろうか。もしも、民衆という概念が、ニューメディアのコンテクスト下にあるすべての普通の生活者を指し示すものであるならば、そして、もしもすべての普通の生活者がマルチメディアの表現手法を借りて自分自身の日常生活の実践を描き出すかもしれないとしたら、民俗学はどのように自らの表現手法を更新すべきなのだろうか。民俗学というディシプリンの使命は、いかにしてそれ相応の調整が図られるべきなのだろうか。さらに、民俗学者はいったいどのように普通の生活者との関係性を処理すればよ

いのだろう。

こうしたすべての問題は、いずれも、ニューメディアのコンテキスト下で、**未来の民俗学**によって解決が待たれる問題なのである。

注

- 1 鐘敬文は生前しばしばこの点に言及している。たとえば「民俗学は、性質の上でいえば現代学であり、即ち現在伝承される民俗事象を研究対象とする科学である」[鐘 1990]、「民俗学は現代学であり、より慎重に言葉を選ぶならば、それは濃厚な歴史的意味を持つ現代学である」[鐘 1998]。
- 2 アメリカ民俗学で、ニューメディアと民俗の問題を集中的に論じた名著には、ほかにリンダ・デスの [American Folklore and the Mass Media] がある [Degh 1994]。

参考文献

- AMOS, D. B. 1971 Toward a Definition of Folklore in Context, *Journal of American Folklore* 84 (「コンテキストにおける民俗=フォークロアの定義へ向けて」大月隆寛訳、1985)
- 鮑辛格、赫爾曼 2014 『技術世界中の民間文化』 広西師範大学出版社
- BLANK, T. J. 2009 Toward a Conceptual Framework for the Study of Folklore and the Internet, in T. J. Blank(ed.), *Folklore and the Internet: Vernacular Expression in a Digital World*. Utah state University Press.
- BLANK, T. J. 2012 Pattern in the Virtual Folk Culture of Computer-Mediated Communication. in T. J. Blank(ed.), *Folk Culture in the Digital Age: the Emergent Dynamics of Human Interaction*. Utah state University Press.
- BLANK, T. J. 2013 *The Last Laugh: Folk Humor, Celebrity Culture and Mass-Mediated Disasters in The Digital Age*, The University of Wisconsin Press.
- DEGH, L. 1994 *American Folklore and the Mass Media*. Indiana University Press.
- DUNDES, A. 1965 What is Folklore?, in A. Dundes(ed.), *The Study of Folklore*, Prentice-Hall.
- DUNDES, A. 1975 The American Concept of Folklore, in *Dundes Analytic Essays in Folklore*, The Hague: Mouton.
- DUNDES, A. 1980 *Interpreting Folklore*. Indiana University Press.
- 高丙中 2010 『中国人的生活世界——民俗学的路径』 北京大学出版社
- 海默爾、本 2008 『日常生活与文化理論導論』 商務印書館
- 河野真 2003 「現代社会與民俗学」『民俗研究』2
- 萊文森、保羅 2014 『新媒介』(第二版) 復旦大学出版社
- 麥克盧漢、馬歇爾 2006 『麥克盧漢如是說：理解我』 中国人民大学出版社
- SIKALA, A. L. 2004 *The many faces of contemporary folklore studie*, FFN 27
- SPITULNIK D. 1993 Anthropology and Mass Media, *Annual Review of Anthropology* 22
- 王傑文 2012『北歐民間文化研究(1972-2010)』 学苑出版社
- 鐘敬文 1990『説話民間文化』 人民日報出版社
- 鐘敬文 1998『民俗学概論』 上海文芸出版社
- 周星 2016『本土常識の意味：人類学視野中の民俗研究』 北京大学出版社

